

鳥

鳥ホ

もう更けていた。晴れた  
暮まゝ夜たつた。

私はシーパス橋から、ほど遠からぬところ

へ足をとどめ、ただ堰水の音はに破られて

静寂を、思い耽つていた。その時、ちよつと

私の鼻上で、ひと聲高く、ふらふらようれ、

ホーホーと鳴く聲かしたので、おびあわつた。

いつもしいつび、脈をつぶとされるのだ。だ



そうでもないところから、誰だつていふ人夢です

?」

私の驚きは、これで一段落ついたものとし

よう。私はステッキをきけた。

「ヨウ、ヨウ。」と、鳥は言った。口鳴いたの

が、どうなんでさつて?、あつたか、と真夏の

夜、この通りはくくへおいでだつたら、な~~ん~~<sup>ん</sup>

にもありやあくないでしよ?」<sup>かね</sup>」

「まあ、ゆゝ〜とくれ。」と、私は言った。口あ

れは、その言葉をよくおぼえて置くよ。今晚

お前の出くわしんのは、ちねすりだつた

と申しあげたよ。す

くし話をしんいものだね。

可ええ。と、鳥は、ふっきらほうに

た。可わたしは、今晚、そんを思ひのけな

ことのあるとは、思ひますんで

晩飯をたとこです。ああ、あ

あまり時間をとらなければぬ。——あ

突然、鳥は高く叫んで、

しく、ふたつかせ、前方へかみ、とまり木

別行一筆リク

をしつめと掴んで、叫びつづけた。あきらか

に、なにものか、うしろから鳥を、引ッ

張ッているようだった。緊張はパツとゆ

るめられた。鳥はほとんどもっさり返さずん

どわりには、<sup>すっかり</sup> <sup>はたて</sup> 驚きまわら羽はたままわ

り、新には目えないうるものへ、反抗的を一

撃を~~き~~行つた。

可憐、<sup>だつち</sup> あきの毒~~ま~~。と、<sup>し</sup> <sup>せ</sup> さいさな、~~ま~~

んを~~ま~~、心配そうに言つた。可憐は、た

しめ、そつとやつたんだよ。怪我は~~ま~~な



いっかゝ。このほつと素直いで——よし、

<sup>人にして</sup>  
~~なま~~も、貴様は、今度もやつたんだ。

おれは、さつそく本元へ行つてやる。そつと

——と、言ひかけながら、空中へはぢにもい

やうとそんがつて——おや、とと

~~きやぶった~~  
~~おれ~~さんだ？、きやぶらう、こいつおれを

「やー」

「かいー」と、おれは言つた。口をな開け

合つのは、おれははじめにじゃなうよつたね。

はつきり言つて、どつとおれおれをえんね？、と



## 別行一守り

「ええ、そのわけはね。と、鳥は、こゝろを  
 えなから、なかに断ちあたりを見まわすまわ  
 して、のだが、それを話しするには、次  
 の週の一審おわりまで待つてくたさい。氣ま  
 ぐれものおやつて来て、誰の尻つぱの羽で  
 も抜き出そうとさるんでさよ！ わたしはも  
 ちにかんどの怪我をさせやがった。お人のた  
 めはさるんか、あたしなつて知りたいやね。  
 あつたはどし思ひます。どくにその理由があ  
 るんでさよ？」

私は、心ゆく人だことを、口の中つぶ

やいた。——口物さあめしい鳥は、あれあれ

の好奇心をさそえるように、夜ごと鳴き怪し

むのだ。

私は、<sup>捕まらぬまま</sup> ~~まま~~ 捕まらぬままの要點を、ほとんど存せ

~~た~~ <sup>の</sup> つかつた。か、鳥は鋭く言つた。口をうで

すつて？、まあ、もう言わなうでらんさい。

向きまへよ。だから、わたしはそのしん底

にあるかあるか、お話ししましよ。よくわ

たしと言葉の氣をつけるんですよ。——鳥は、

私のほうへ身をよこせ、まじいおんまを幾度

かゝるまじいおんまを、さきやいな。口<sup>儼然と</sup>儼然と



知らん顔でいっしょに  
まじいおんまをさきやいな！ それだけ

どいんか  
どきよ！ あれあれの仙女さん

おんまをさきやいな  
このまじいおんまは、はげー

軽蔑の調子で、つてつたに、近おすいちゃ

いけなさい。おう、決<sup>近おすいちゃ</sup>して！ あいつ等の同類

い、好感はもてない。野や畑のすばらしき歌

い手に、ほんやりする時こそ、ほまきすべき時

ですよ。今が、そうい<sup>おんま</sup>やなんですか？！

「うむ。と、おれはひどく腕に落ちない顔

で、**おれ**はいろんまことを聞きたいよ。だ

が、**ね**。<sup>フイタ</sup>鴨カモだとか、<sup>フイタ</sup>鴨カモだとか、いつたものか、

た〜さんこゝにはいるらしい。<sup>また</sup>お前はそのことを知つて

るはずだが、どうだね？ だとすれば、たお

ん——無論おれは知らないんだが——たおん、

お前の歌い方は、そんな運の跳はにひつたり

しさいのじやないかね？ え？。と

「いや、それはまっぴらでさあ。と、鳥は、

及び返えつゝ答ええ。日おし達●仲向の歌い

方は、踊に合ふよき者もんどやない。それだに

つて合ふよき者もんどやない。ええ、あやう

いふ~~を~~をお手えなさらうとぬ！ 山だんだん、

怒りつぽい調子になつて、曰あたしおら言え

ば、あいつらの吃逆しゃんがりに合ふやうに、いや、もつて

まいどをよぶ——鳥は、ちよつと言葉を切り、

いふりや上を、用心深く見まわした。そし

て、まゝもつと高い聲をつづけた。曰あいつ

ら——あのちいさな紳士淑女諸君の吃逆はぬ。

もしもぬかあいつ等のお氣に及ばなまや、あ

たしのお氣いも取しませんよぐで(と、まじり  
 怒りつぽい調子で)、もしあいつ等が踊った  
 り、馬鹿をつおけたりする。ことに、わたしか  
 文句をいわないと思つてるから、大まぢかい  
 びさあ。わたしは、あいつ等れ、さう言つて  
 やりませうあ。止

これは <sup>軽率</sup> 輕率なことをいふと、おは心配した

のたか、そんな起つた事から見て、おの考へ  
 はまさかあなつかつた。鳥がおしまいに力強く  
 くなく、やいなや、ちいさな華細いものが

上の板から落ちて来た。~~草~~草の根の

よりなみらみらしんのか、~~草~~不幸な世の

からたのぐりりね投げあけられた。そして鳥

は、聲高く反抗しなみらし、フエロー世の方

へ、~~雷~~雷 空中を~~連~~連<sup>（拉到され）</sup>動~~き~~き~~所~~所~~を~~取~~て~~てしめつた。

カンブリと水の音、ゴロゴロと鳴らす雉の音、

冷酸まいたいの叫びを、私は、急いで追っわけ

を知らずも耳にしん。

まいかか、私の頭上を飛び去った。そして、

私の、すつかりはきつてつた地を、堤からさ

しのぞいた時、ポンポン思った、もしやもしや

頭の鳥が、<sup>苦しげ</sup> ~~きんきん~~に堤へ這いあがつて来た。

こめから<sup>きんきん</sup>私の足もとで、ブルツと身ぶるうし、

習字をバタつかせ、しばらく<sup>ニユー</sup> ~~きんきん~~ <sup>ニユー</sup>

息を吐いた。やめろとわつても、返事と一言

あつた。

それから、私をぬめつけるように、やがて

口を叩いた。——その不吉らしい押しつけた

聲音は、私を一二度思わぬとすきりさへ

ほどだった。



「どの、どこへ行まやぶつた？ へん、おれ

の毒さまだ。あいつ等、おれを鴨だとまちが

えやがったんだろ。おう、誰があいつ等、

のめつたふいかきれてまうもんか。何ア

ん、どんをものだつて、めちやめちやに、

引つ張いてやれないうまうつことか、あうも

んか。」

こう、夢中に怒り出して、息は、まぢ手は

じめり、大ききまひと銜くちえの草を、ひき抜きは

じめり。だが、あつ！ 草はその喉にささつ



だった。そこでわれわれは、ひどく氣まずげ  
 ん、ちよつとだまつたまま、~~顔~~を見おろし  
 立っていった。そこへ一つの氣分轉換の起つた。  
 はじめに<sup>さん</sup>亭の時計が、おすおい鳴つた。つが  
 いて城の中庭から、ふみぶのどした時計の響  
 きが聞えた。つがいて、~~ラ~~ポトン塔の時計が、<sup>のまろ</sup>  
 カーフユール塔の時計の音を、この近めさのた  
 のい打ち流すようにみびいた。

曰ありやあそんでさ？と、鳥は、急ん、

しやがれ聲で言つた。

「真夜中だ。お美。」  
「おは、さう言つて、おの懐

中時計を使つた。

「真夜中？」  
「鳥は、お美、おの懐中時計」

たよつたつた。口でも、わたしはひとく濡れ

てゝので、一ヤードだつて痛くせよせん。

ねえ、わたしをつめんで、樹にのつてくた

さい。いいや、あやうの脚をのぼつて行きま

しよ。さうすれば、あやうは、それを二

度しよつとほ言あないでしよ。さあ、早く

！





そして私は、あるほどオーライだと思った。

といふのは、鳥が、翼をひろげて突進に幹を  
 飛びのぼり、あり難くとも言わすいで、空洞  
 の中に姿を消したのみである。

私は嬉々然と持て、あたりを見まわした。

カーフスー塔の時計は、また、聖ダビデの曲  
 と、それに伴うちいさな組鐘ナヤムの音と、第三の

最後の時間中、鳴らしてあげた。たかほりの

鐘は、鳴らたけ鳴つて音を収めていた。そ

と今や静寂が、あたりをみまわった。ふた

び、絶え向なく暮れる堰水の音のなか、静寂  
を破る——いや、静寂を強<sup>め</sup>くする、ただ一つ  
のしのであった。

なせ鳥が、あんなに懸命に、身を隠くそ  
うしたのか？ それは、言うまでもなく



今、物に、くうくうと空をさそへたしのだっ

練習

た。——なまにの、訴か、やつてまわつたあ。

終は、ひろい舞臺つばを横切った時のそよいこ

とは、たしかなだった。そこで私は、樹の暗い

蔭に立つて、身を隠さるくそくと努力する





は、ふしむな顔を見る。 <sup>送る</sup> そと、そんな顔

をもちた人とは、諸君が待ちもくけもくまい

のれ、しばしば諸君の向近の <sup>送る</sup> いれいも奇

怪い ~~送る~~ スッと通り、 <sup>送る</sup> 諸君の顔を、 <sup>いろいろ</sup> ~~送る~~

見つめる。それは彼等の顔の <sup>送る</sup> 一し、彼

等の、その人を見つけたければあり類いと思

うらしい顔かを、さかしおめて <sup>送る</sup> いるよう <sup>送る</sup>

ある。

口どろから、あいつ等はまた <sup>送る</sup> のたろく

？、<sup>送る</sup>

どうも、或る者は水の底から、或る者は地  
の底から出て来たらしく、おれは思えるのだ。  
彼等はそく思えるのだ。

だが、おれは、彼等に氣をとられたり、彼等  
に触れたりするのび、いちばんいいと確信  
するのだ。

そうだ。おれはたゞおれ、夜あけて公園にい  
る人々も、日中の公園の人々のほくお好  
ましいのだ。